第12回FMESシンポジウムルポ

情報の窓

桑畑 暁生（(財)電力中央研究所）

去る平成8年6月28日，日本学術会議講堂において第12回FMESシンポジウム「グローバリゼーションにおける生産と社会」が開催された．毎年開催される当シンポジウムであるが今年は昨年に引続き，「グローバリゼーション」という日本が直面している問題をテーマとして取り上げたこともあり，参加者は130名を数え，なかなかの盛況であった．毎回ながらシンポジウムの裏方を務めていただく関係者の方々のご苦労が偲ばれる．

当日は総合司会の武蔵工業大学大槻繁雄先生のリードのもとに，まず日本学術会議経営工学研究連絡委員会（FMES）委員長，大島栄次先生の開会の挨拶，ついで特別講演，パネル討論会の順に催された．

冒頭の講演では「グローバリゼーションにおける開発と社会－国際フレグランス市場への参入－」と題して，㈱資生堂の長井克之氏よりフレグランス（芳香）商品における国際市場への参入戦略について講演が行われた．長井氏は国内と欧米市場での市場構造，商品の使い方や文化の違いを比較し，国内でのマーケティング戦略と国際マーケティングの違いについてその概略を示していただいた．端的にいうならば，国際市場での基本的な戦略は商品カテゴリーや地域，流通チャンネルにあわせたブランド戦略を構築すべきであると指摘された．製品自体の多品種小量生産化は定着して久しいが，ブランドイメージもターゲットに合わせて差別化する必要性が顕著な市場例であると感じた．

次に「アジア地域の我が国企業活動をめぐる諸問題－実務的，法的見地からの検討－」と題して名和国際コンサルタンツ代表名和聖高氏からの講演が行われた．近年一般的になりつつある中小企業の生産拠点の海外進出に伴い，さまざまな問題が現出しているわけであるが，その中から特に契約，雇用，情報収集といった実務的，法的な問題について日系企業が陥りやすい問題について取り上げていただいた．これらの問題が発生する主要な原因は商慣習に代表される文化の違いにあるというのは素人にも容易に想像はつくが，現実問題としては海外のパートナーとの正式な契約，協力という本格的な海外進出にいたるまでにもさまざまな段階で彼我の認識の違い，その地域ごとによるアプローチの違いなどが存在することを解説していただいた．これらを克服するために，相手先の国自体に対する豊富な知識と，それらをうまく生かす情報収集の努力が不可欠であると指摘された．コンサルテーションの現場から得られた豊富な事例は興味深かった．

最後は(社)日本プラントメンテナンス協会顧問中島清一氏より「TPMのグローバリゼーション」と題してお話しいただいた．TPM(Total Productive Maintenance）は1971年に日本プラントエンジニア協会が提唱したものであり，生産システム効率化の極限追求（総合的効率化）をする企業体質づくりを目指し，災害・不良・故障をゼロにするためロスを未然防止する仕組みを現場で構築する活動の総称と自ら定義している．日本では高い効果を挙げているTPMを海外展開する際の，その否定的要因とそれに応じた対策例を挙げながら異文化社会にも通じるTPMの経営理念を解説したいただいた．全社的な総合効率化により，かなりの実施効果と体質改善が期待できると感じた．

休憩の後，3人の講演者をパネラーとしてパネル討論会に移り，東京大学久米均先生をパネラーリーダーとして，活発な討論が行われた．

フロアからも幾多の質疑が寄せられ，TPMとTQCの適用の順番やTPMのISO規格化についての質問などが寄せられた．これに対し，現場での実行の容易さからTPMの方が先に実施される例が多いが，全体効率を考えると逆の手順の方が効率的であることなどの説明がなされた．また，グローバリゼーションに伴う国内産業の空洞化の現状などについても質問が寄せられ，日本国内の生産拠点と海外の生産拠点のコンビネーションが望ましいが成功例はさほど多くないことなどが挙げられた．

最後に青山学院大学　佐久間章行先生の閉会挨拶を得て，本シンポジウムは盛況のうちに閉会を迎えることになった．　（桑畑暁生　(財)電力中央研究所）

© 日本オペレーションズ・リサーチ学会．無断複写・複製・転載を禁ず．